

「東京モーターショー2019」で注目を集めた「FUTURE EXPO」

神谷 直亮

第46回を迎えた今年の「東京モーターショー2019」は、「Open Future」をテーマに掲げて華やかな変身を遂げた。その一つの例として挙げられるのが、新型車や試作車の発表に加えて、未来の生活を体験・試遊できるテーマパーク「Future Expo」の新設だ。

見どころ満載の「Future Expo」は、東京テレポート駅と青海駅に挟まれた「MEGA WEB」ビルスペースをすべて使って設営され60社・団体が最新の技術・システム・機器などを紹介していた。

まず、ハイライトとしては、未来を象徴する「宇宙エリア」と「水素エネルギー」の展示が挙げられる。

「宇宙エリア」には、iSpace社が「HAKUTO-R 月着陸船」と「HAKUTO-R 月面探査ローバー」、宇宙航空研究開発機構(JAXA)とTOYOTAが月面探査車「有人圧ローバー」、ブリヂストンが「月面対策用タイヤ」、三菱重工業が3種のロケット(H-2A、H-2B、H-3)を出展し来場者の関心を呼んだ。また、このエリアの背面では、3画面構成の大スクリーンによる「G-Satellite 宇宙へ」のプレゼンテーションが行われ注目の的になった。JAXA、東京大学、東京2020組織委員会などがコラボし、宇宙から機動戦士ガンダムが東京オリンピック・パラリンピックへールを送るというワンチーム・プロジェクトである。説明員によれば、国際宇宙ステーションからガンダムを放出するタイミングは、

「2020年3月から4月にかけて予定されている」という。

「水素エネルギー」のコーナーで人気を得ていたのは、川崎重工業による「神戸液化水素受け入れ基地」を紹介するVR体験であった。台湾のHTC社の「VIVE」ヘッドセットを装着して、オーストラリアで液化された水素を運ぶ運搬船、直径19メートルの巨大な水素貯蔵タンク、2020年春に完成予定の受け入れ基地などを臨場感に満ちた映像で見ることができる。

このコーナーには、さらにJXTGエネルギーの「ENEOS水素ステーション」、千代田化工建設の「SPERA水素(トルエンに水素を溶かしたもの)のサプライチェーン」、トヨタの第2世代「MIRAIコンセプト車」(2020年末発売予定)などが展示され「水素で未来を切り拓く」と高らかに宣言していた。

既述の川崎重工業以外にもデンソー、スズキ、トヨタがVR体験の場を提供し長蛇の列が見られた。

デンソーは、来場者をブースに設置した「VR-Car」に乗せ、サムソンのヘッドセットを装着して、春の姫路城、夏の熊野古道、秋の白神山地、冬の白川郷など、日本遺産の四季を堪能できる試遊の場を提供した。スズキは、「ジムニーVRシミュレーター」で、狭いトンネルをくぐったり、曲がりくねった海岸沿いを走ったり、油断のならないコースを走る試遊を促していた。

トヨタは、アイロック社製の2軸ドライビングシミュレーターに乗り、サムソンの「Odesay」VRヘッドセットを装着して臨場感に満ちた運転を味わえる場を提供していた。衝突事故を起こすとシミュレーターによる衝撃が全身に伝わるのが肝と言える。

さらに会場では、ロボット、8K、5G、ドローン、AIが目を引きいた。

最新のロボットを展示したのは、トヨタ、総合警備保障、セコム、ソニー、ユカイ光学など数えきれなかった。

トヨタは、バスケットロボット「CUE」を会場に持ち込んでフリースローのデモを実施した。「外す気がしない」と宣言した通り、100発100中の成功率に来場者の歓声があがった。説明員によれば、「ロボットの顔には、ネットを注視するカメラが1台、距離を見極める赤外線カメラが2台搭載されている」という。

総合警備保障は、セキュリティレベルを極力高め、自律移動による巡回監視を行える新型警備ロボット「REBORG-Z」を出展した。担当者は、「小型カメラや顔認証機能など最先端の技術を搭載しており不審者や侵入者の検知を行うことができる。また、危険なガスや火災などの検知も可能で、防災面・減災面での活躍も期待できる」と語っていた。走行時間と動力を聞いて見たら

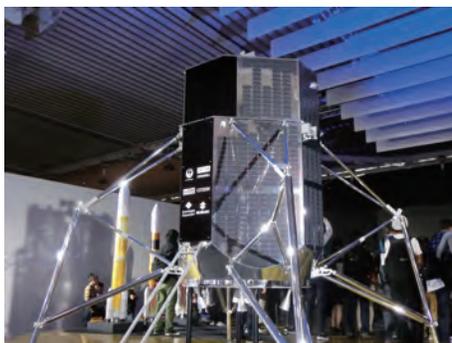


写真1 「宇宙エリア」では、iSpace社が「HAKUTO-R 月着陸船」を出展して注目を集めた。



写真2 デンソーは、日本遺産の四季を試遊できる「VR-Car」で人気を得ていた。

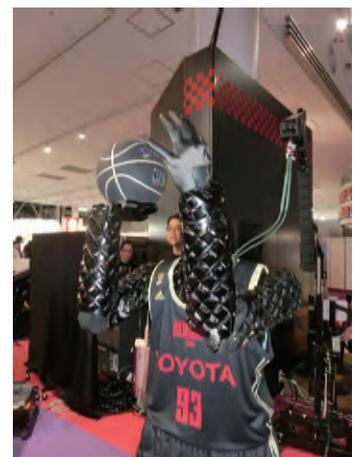


写真3 トヨタは、AIバスケットロボットを出展し、フリースローのデモで来場者を魅了した。



写真4 シャープは、8Kの超高精細映像を生かした新しい野球観戦の仕方をPRした。



写真5 NTTドコモは、「5Gデモバス」の車内で13K映像を再生して見せ注目の的になった。



写真6 プロドローンは、救助隊員を乗せて飛ばす「パッセンジャードローン」を出展して意表を突いた。

「連続走行時間は4時間。動力はリチウムイオンバッテリー」との回答であった。また、価格については、「警備員を5年間雇ったくらい」と答えていた。

セコムは、「バーチャル警備員システム」を搭載したロボット、ソニーは、同社自慢の「AIBO」、ユカイ工学は、家族を繋ぐ見守りロボット「BOCCO」を紹介して注目を集めた。

8Kのデモは、シャープの独断場であった。同社が「視力4.2で野球を診断。あなたがスポーツアナリスト」というテーマで行ったのは、8Kの超高精細映像を生かした新しい野球観戦のPRである。実際に、同社の8Kモニターを使って、ピッチャーの初速、バッターの打球角度と打球速度、ランナーの走力などを診断して見せていた。

5Gに関しては、NTTドコモが多様なデモを繰り広げた。まず、同社が誇る「5Gデモバス」を持ち込み、車内に設置した13Kの映像を再生できる大画面で来場者を魅了した。構成は、センターに7K 1画面、両サイドに3K 2画面で、5.1チャンネルの音響設備と共に高臨場感と没入感を演出していた。コンテンツはサッカーの試合で「スタジアムより贅沢かも」と自慢げに語っていた。使用しているプロジェクターの数を聞いて見たら「4Kプロジェクター4台で投影している」との回答であった。

次いで、もう一台「SCOT (Smart

Cyber Operating Theater)」と名付けたいつでもどこでも高度な治療を施せるコンセプトカーを紹介して注目を集めた。東京女子医科大学との共同開発で、カギを握っているのは「SCOT」車内のスマート治療室と経験豊富な専門医がいる戦略デスクを結ぶ超高速・低遅延の5G回線である。

さらに、「快適なオフィスで建設作業」というテーマで、KOMATSUと共同開発した5Gによる建設機械の遠隔操作コーナーを設け、来場者に実際に作業をトライさせていた。

最先端のドローンの展示で来場者の意表を突いたのは、プロドローン、NEC、A.L.Iテクノロジーだ。

プロドローンは、「SUKUU」と名付けた「対話型救助用パッセンジャードローン」を出展した。このドローンは、一人の救助隊員をパッセンジャーとして乗せて飛ばすことを想定している。

NECは、「空飛ぶクルマ」のモデルを展示して「地上と空にまたがる次世代の移動と輸送手段になる」とPRに余念がなかった。今年すでに工場試験飛行を行ったというこのドローンのサイズは、4m x 4m x 1.3mと巨大だ。

A.L.Iテクノロジーは、これらの中間を狙った「空飛ぶバイク」を披露した。

上述した多種多様な展示とデモ以外にも見逃せないものがあった。

パナソニックは、「リビングが動き始めました」というテーマで、住空間とモビリティ

を融合した未来の自動運転車「スペース・エル」の内部を紹介した。2030年には実現したいというこの車のコンセプトは、「天井とサイドに設置する有機ELスクリーンで映像を楽しめる。タッチ式スクリーンにする。席に座ったままテレビ会議ができる。22個のスピーカーによる視聴環境を整える。シートにエアコンを内蔵する」など、リビングと同様にありとあらゆることができる。

三菱電機は、「しゃべり描きアプリ」のデモを行った。世界初というこのアプリは、iPadやiPhoneを使って話した言葉が、画面を指でなぞることで文字として表示される。多言語対応になっており、外国人とのコミュニケーションにも使える。

富士通は、AI自動採点支援システムと3Dセンシング技術を駆使する「スポーツICT、Skill Monitor V2」を実演した。具体的には、運動能力を可視化して証明する「なわとびセンシング」とゴルフの実力を厳しく評価する「ゴルフスイング丸裸」のデモが行われた。

これらの他に、NTTの超高臨場感通信技術「KIRARI」、富士通の「RETISSA」と名付けられたレーザーを駆使するバリアフリーウェアラブルメガネ、NECによる顔認証AIなども注目を集めていた。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト